

ヴィレッジ・オブ・ホープ Village of Hope

2013年 デジタル モノクロ 72分 タイ 日本語字幕付き

監督：ブンソン・ナークパー

プロデュース：ブラベン・ワイ・トゥアン・ナム フィルムスタジオ

脚本：ブンソン・ナークパー

撮影：ティーラワット・ルジンタム

編集：エカラット・アナンタソムブーン

音楽：ガイワン・グラワッタノータイ

出演：グライソーン・ナークパー

トゥープ・ナークパー

シリモンコン・ワイブット

ブンチョープ・ナークパー

ジョンプラサーン・ナークパー

若い兵士ソーンは、半年後の除隊を前に、故郷のワンピクン村に一時帰省する。この農村には年老いた祖母や父方の親戚たちが住んでいるが、ソーンの両親はいない。ソーンの父は、祖母から譲り受けた土地を抵当に借金をした結果、破産し、現在は遠方で庭師をしている。母は、まだ幼いソーンを残して家を出た後、疎遠になり、兄も今では行方不明となっている。帰省しても親戚の叔父や叔母に歓迎されないソーンは、離散してしまった家族への思いと孤独感に苛まれる。一方、親戚たちの家でも若夫婦が離婚して村を離れ、実家に残された幼い孫たちはソーンと同じように言い得ぬ寂しさを胸に生活している。そして、昔ながらの農業を営む親戚たちは、不作により借金も返せない苦しい状況が続いている。そんな中、バンコクに住む裕福な叔父が、一人息子を連れて祖母に会いにやってくる。

「Village of Hope」という英語の題名とは裏腹に、故郷とはいえども希望を見いだすことができないソーン。そして、多くは語らないが、ソーンを含め親族のことを案じている祖母。監督は、現代社会における開発や消費、グローバル化が、「家族」にどれだけの影響を及ぼしてきたのか、その根本的な問題を貧しい農村の家族を通して映し出している。農村地帯から想像される美しい風景とはかけ離れた現実を描くため、監督は本作を白黒で撮影した。監督の故郷の農村ワンピクンを舞台とした三部作の第二作であり、タイ・フィルムアーカイヴにて「タイの映画遺産」として保存されている。

監督メッセージ

私の故郷は、皆さんが想像するようなロマンティックなところではありません。(ですから、私はこの映画を白黒で撮影しました。) 30年ほど前はロマンティックだったかもしれませんが、今ではまったく変わってしまいました。開発によって、グローバル化、あるいは、呼び

方はどうであれ、資本主義、物質主義、消費主義がもたらされたのです。私たちは、開発はより良い生活をもたらすものだと思わせています。確かに、変化は避けられず、否定もできないゆえに、受け入れざるを得ないでしょう。しかし、私は開発をありがたく思っていない。政府の方針である社会的・経済的開発は、家族制度に大きな影響を及ぼしてきたからです。この映画に出てくる貧しい農家は、我が国の根本的な問題全体を反映しているのです。

ブンソン・ナークパー(Boonsong NAKPHOO)

監督プロフィール

1968年タイ生まれ。2011年カセム・バンディット大学院でコミュニケーション・アート（映画・ビデオ）を専攻した修士課程を取得。1995年に短編映画を撮り始め、『Grandfather and Grandson』（96）、『Going Home』（97）等がバンコク映画祭で賞に輝いている。長編映画では『Four Station』（12）がドービルアジア映画祭審査委員賞を受賞している。本作は監督の最新作。

（2019年アジアフォーカス・福岡国際映画祭カタログより）